

曾野綾子

神の汚れた手
上



神の汚れた手上
曾野綾子

朝日新聞社

神の汚れた手 上

昭和五十四年三月十日 第一刷発行
昭和五十五年三月三日 第七刷発行

定価 九二〇円

著者 曾野綾子

発行者 藤田雄三

発行所 朝日新聞社

東京・大阪・名古屋・北九州

印刷所 図書印刷

©Ayako Sono, 1979
0093 - 254729 - 0042

目次

光と風	5
馬の背中の岡	33
山の淡雪	55
逃避	94
海鳴り	137
未婚の母の家	171
ナザレの大工	198
選ばれたもの	233
梅雨時の客	265

装帧
桜井幸太郎

神の汚れた手
上

光と風

今から十年ほど前、野辺^{のべ}地貞春^{さだはる}は、産婦人科の医院を開業するために、湘南で土地を物色していたが、その時、彼の頭にあつたのは、できれば海の近くに行きたい、ということであつた。貞春は神奈川県の逗子で生まれた。家から海が見えたわけではないが、風にはいつも「太平洋の匂い」がした。それで本能のように、自分の住居を持つとなれば、両棲動物のように、波の音の聞こえる所に近づきたくなる。

しかし、考えてみると海の岸というのは、何とも客商売には向かないものであつた。何しろ水の向こうには人間が住んでいないのだから。そんな簡単な現実さえ把握していなかった自分がおかしかった。それで、生業^{なりかひ}のためには、大いに趣味を犠牲にしたつもりで、けっきょく今の土地を選んだ。ここは土地区分としては横須賀市に属する。三浦半島の西側を走る国道一三四号線を南下して、武山の自衛隊を過ぎた所で、海の方へ折れた台地の上である。

貞春が選んだ土地はキャベツ畑であつた。いや、夏は西瓜畑、冬は大根畑になるところである。その土地に立つてもほとんど海は見えなかった。ほとんど、というのは、二千平方メートルほどの敷地の一隅に僅かばかり高い部分があつて、そこに立つて目をこらせば、ほんの一部に海が見える、とい

うことである。もっとも、その土地を選んだ最大の理由は、比較的、地価が安い、ということであった。そのために貞春は、数年前に死んだ父から遺産としてもらったばかりの逗子の土地を売り、僅かばかりの株券も手放し、それでも足りなくて、母が現在住んでいる部分の家と土地まで抵当に入れて銀行から金を借り、やっと今の病院を作ったのである。

貞春はちょうど新婚時代であった。病院の開業と長女の香苗^{かなな}の誕生とは、一月ほどの差しかなかったのだが、当時の彼らの住居は、南京下見にペンキを塗り、部屋の中はベニヤ板を張った、見かけだおしの安普請であった。その代り、貞春は恒久的的に使う「営業用建物」の方には、やや贅沢をし、夢をとり入れることにした。それは入口に待合室を兼ねた円型ホールを作り、その二階、三階の部分からは、海が更によく見えるようにしよう、という計画であった。医院や病院という所は、どれだけ明るくても、明る過ぎるということはない。

貞春はいつも九時十五分前には、診察室に入り、そこで前夜の当直から炊事、掃除の係までを集めたミーティングをやることになっていたが、その朝、彼の姿を見かけると、円型の待合室の方から素早くとんで来た五十年輩の女がいた。髪をナイロンのスカーフで包み、膝の出たスラックスをはいて、化粧気もない。

「先生、ちょっと訊きたいんですけどよ。ここの病院で赤ん坊生むと、皆、男になるって本当かね」
野辺地貞春は、相手の顔をじっと見つめた。初め彼は、相手とは初対面だと思ったのだが、向こうは案外、彼をよく知っているのかも知れない、と思いいなおした。貞春はもう十年早く、昭和初年に生まれていたら、戦闘機乗りになっていたろうと思われるほど、いい視力を持っていて、人の顔などよく覚えるほうであったが、農家の女性に、農作業用のボンネットなど被^かられると、お手上げであった。テキはこちらをよく見ていて、こちらは相手の顔が見えないということになるからである。

「うちで生まれる赤ん坊は全部男だって、誰が、そんなこと言った？」

「誰ってこともないけど、田中さんここでもよ、原さんここでもよ、先生んここで生んで、皆、男だったからね」

「どこの田中と、どこの原だ？」

この土地では、田中や原姓はごろごろしている。

「本家の田中さんと、原良男さんのところでしょう。それから、雑貨屋の原さんとも、半年ほど前だけど、男だったですよ」

「考えてもみろよ。そんなこと、あるわけねえだろ」

貞春は土地言葉で言った。

「男ばかり生まれたら、日本は、どうなるよ」

「うちは、今まで、二人、女ばっか続いたから、今度は男でないと困ると思って、それで今までは市民病院へ行ってきましたけどよ、今度は先生んそこへ来たですよ」

ありがたい評判だ、と貞春は思った。手術の腕がいい、とか、不妊症を治すのがうまい、とかいう評判も、多少はあってもいいと思うのだが、こういう連中の来るのは、全く他の理由なのだ。

「あんたの娘さん？」

「いいえ、息子の嫁です」

日本中が男ばかりになったって、このおかみさんは一向に構わないのである。それより自分のところに跡継ぎの男の子が生まれるかどうかに関心事なのであった。

「安心しなさいよ。もう男か女かは決まってるんだから」

貞春は慰めにもならない言葉を吐き捨てて診察室に入った。従業員は婦長の大久保茂子おおくぼ しげこ以下十三人だが、そのうち一人か二人は必ず休んでいるので、ミーティングに出るのは、十人近くである。

昨夜の入院患者は五人であった。お産のあとが三人、切迫流産を止めるために入院している農家の

嫁さんが一人と、流産の後の貧血のひどい患者とである。前夜、十一時に出産した産婦の一人が、その後、お腹が痛くて眠れなかった、という訴えがあっただけで、とくに変化はなかった。三人の赤ん坊は、二人が男だったが、残りの女の子が黄疸がやや強くなったので、光線療法を始めている。

「今日は、二人、約束あったな」

貞春は机の上のメモを眺めた。約束というのは妊娠中絶の患者のことである。

しかし貞春は、恐らく既に来ているに違いない。「約束」の患者の処置に、すぐにとりかかることはできなかった。机の上の電話のベルが鳴ったからである。

「あのう、樋口さんという方が見えましたけど」

自宅の方に通いで来てくれている家政婦の井上元子いのうえもとこの声であった。

「樋口さん？ 男？ 女？」

「男の方です」

「じゃあ、こっちへ通ってもらってくださいか」

貞春は客が病院の方へ廻ってくるであらう、二、三分の間、患者を呼ばせずに待っていた。若い時、貞春はかなりせっかちであったが、四十歳を過ぎた今日、自分を考えてみると、驚くほど、気が長くなっていった。大学の医学部の仲間が、都内で開業したがる中で、生まれた逗子より、更に辺鄙な遠くまで「都落ち」したのも、本当は心のどこかに、あまりはやってほしくない、という気分があったのかも知れない。

もちろん、面と向かってきかれれば、貞春は借金もしよっていたし、そんな悠長なことを言っている身分ではなかった。金も好きだし、儲けたくもあった。しかし一割くらいは、稼ぐばかりが能ではない、と思っていた。だから、外来が駅の待合室みたいに混雑して来ても——そんなことはめったになかったが——貞春は少しも急がなかった。第一、患者の多くは、忙しい忙しい、と口で言うは

どには急いでいない、ということが、わかって来たからである。

やがて、女ばかりの空間を通らされて来た男の、当惑を体中にあらわした五十代の後半の白髪のが、ためらいながら診察室に入ってきた。

「いや、どうも、ごぶさたしました」

貞春は言った。

「もう少し早く伺うつもりが、九時を廻ってしまいました」

樋口と呼ばれた男は手に持っていた風呂敷包みを開けて、中から包みを取り出した。

「これは、お嬢さんにさし上げて下さい」

「どうも、ありがとうございます。いつもご心配頂きまして」

貞春は快活に礼を言って、

「昨夜はどちらに？」

と尋ねた。

「小網代こあじしろの方に、うちの客のスウェーデンの人の別荘がありまして、そこへ泊りました」

「ヨットですか？」

「江ノ島まで、行きました」

そこで客は、何気なく尋ねた。

「奥さんは」

「十五日までに帰ると言ったのですが、まだ帰っていません」

「今度はどちらに？」

「ハワイです。娘の冬休み中はうちにいたんですが、九日に発ちました」

貞春はもう今までにどれだけ、妻の行動について、この手の会話を繰り返して来たか知れなかった。

金があることを理由に遊び歩いている医者の女房ということになれば、誰もが一応は納得する。しかし、次の瞬間、相手は必らず貞春の表情に、その先の段階を期待するのだった。つまり、貞春が夫として、そのような妻にてこずっていることを知りたいのである。

ところが貞春が、少しも困っていないどころか、妻の我儘勝手を完全に承認しているような表情を見せると、たいていの相手は、当惑の色を示す。まあ、夫が納得しているのなら、はたが文句をつけることではないが、そんな甘い顔をしていいのかね、と言いたげである。しかし貞春はけろりとしたものであった。少なくとも、他人はそう思いそうな程度に、平静であった。妻の真弓まゆみが、しきりにあちこち遊び歩くのは、何より性格が、弱いからなのである。そして貞春の実感によれば、先天的に弱い人間を、教育によって強くするなどということは、これはもう、全く無理な話なのであった。

しかし今日、妻のことを話す相手としては、貞春はこの樋口に対してだけは、やや特殊な感情を抱いていた。この人は、昔はどこかの商事会社かにいたのだが、今はやめて、銀座の有名な店内装飾の会社の役員として迎えられているとかいう。真弓は音楽会で、樋口の妻の多佳子たかこと知り合い、それから誘われて、占いに凝り出したのである。

「お宅の奥さんも、今、おでかけですか」

貞春は、機嫌のいい表情で尋ねた。

「いや、宅のは只今はおります」

「そうだ、あれは、いくら親友でも、同じ方角には旅行できないんでしたな」

貞春は思いついたように言った。

「去年から今年にかけて……もっとも節分までだそうですが、家内はどこへも出ない方がいいんだそうで、買物も、あまり出ないようにはしております」

「うちの女房は、その節分までに、どうしてもハワイの方へ行かなきゃならないんだそうで、ハワイ

というのは、日本から見ると、南東ですかな」

貞春はにこにこしてそう答えながら、看護婦の岩波啓子いわなけいこが、こっそりどころか、かなり大々的にあくびをしたのをじっくりと見ていた。啓子は締まった肉づきのいい体つきをしているのだが、若い娘のご多分に洩れず、秘かに痩せたがっている。しかし、そのみごとに体のおかげで、啓子は看護婦たちの中で一番の力持ちで、それがどれくらい役に立っているかわからなかった。

「いろいろと、家内がご迷惑をおかけ致しまして……」

この樋口という人物の誠実さは、野辺地真弓が占いの狂的な信者になったのは、自分の女房のせいなのだ、ということ、いじらしいほど素直に認めていることであつた。

貞春は、真弓の占いに対する執着を、別に樋口多佳子のせいとは考えていなかった。妻の弱さも、特別のものとは思っていなかった。

「この頃、上流階級の奥さま方の間では、占いがうんとはやっているのよ」

真弓は貞春にそう言ったことがあつた。

「そうか、じゃあ、君は上流階級というわけだ」

貞春は、新聞を読みながら答えた。

「知的な人がみんなそうなのよ。下川路しもがわじさんの奥さまも、首藤すどうさんの奥さまも、皆うちの先生の所へお伺いにいらっしゃるんですもの」

下川路は元の外務大臣で、首藤も通産だか大蔵だかの大臣をしたことのある人物である。

「そうか、じゃあ、君も知的なんだな」

「ふざけないでよ」

真弓は本気で怒った。

「何を訊きに行くんだ？」

《方角と日どりよ。入院も退院も、引越しも、旅行も、ちゃんといい日があるんですもの》

真弓はそれから更に、有名な財界人の夫人たちの名前を半ダースほど挙げ、彼女たちがいかに関心した生活に「その人の運命にさからわないために」占いの命じる通り素直に従って生きており、夫たちもそれについて、決して異を唱えていないことを強調した。それをまともに聞いていけば、日本の政治も経済も占いで動いているような印象を受けそうになるくらいだった。

たとえそうであっても、貞春はそれをとくに、嘆かわしい状況だとも感じなかった。占いでなくとも、政治というものには、同じくらしいのまやかしがつきまとうものだろうし、個人的には、誰もが自分の中の弱さに、逆にしがみついて生きているものなのである。

樋口夫妻には子供がない。樋口が菓子だのチョコレートなどを持って度々やって来るのは、自分の妻のために、野辺地貞春の一家の暮らしがめっちゃになり、中でも一番被害を受けたのは、娘の香苗だと思っているからなのだが、ありがたいことにといふべきか、皮肉にもいふべきか、香苗は海岸の陽にこんがりとした肌をした、まことに健康そうな九歳の娘に育った。母親がしじゅう家にいないということは、教育ママの被害を受けずに、学校からの行き帰りの道の僅か二、三百メートルの距離も、十分に道草をくいながら歩けるということで、時には親がいない方が、子供はみごとに育つということを裏付けている。

貞春は、それから二、三分、樋口と釣の話などしてから、彼を送り出した。看護婦の岩波啓子が、もう一度、悪気のないあくびを見せたのが、そのきっかけであった。

「じゃ、始めるか」

貞春は、外来の主任のなかや しきまさこ中屋敷正子に言いながら机の前に並べられたカルテを見た。中屋敷が、一番最初の患者の名前を、マイクrophonで呼んだ。

野辺地貞春はよく他人から、自分の職業について、さまざまな質問を受けることがあった。その多

くは、貞春がなぜ産婦人科を選んだか、それは性的な興味と結びついているのではないか、という質問であった。

全く無関係と言ったら嘘になるかも知れないが、その質問に対する答えは、一日診察室にいてもらったらわかる、という言い方を貞春はしていた。おれの仕事は、自動車の修理工と一番よく似ていると思う時がよくあるのである。職業というものはおもしろいもので、小説家の仕事の大半はブロック積みの職人と同じだと書いている作家の文章を読んだことがあるし、コンクリートを打設するために木で型枠を作る大工の作業を見ていた男物の洋服屋が「あれは俺の裁断とおんなじだ」と叫んだという話もどこかで聞いたことがある。

一番初めに呼び入れられたのは、廊下で貞春を捕えて、「ここでお産をすれば皆男が生まれるか」と尋ねた女の、息子^この嫁である。妊娠の診断は市民病院で受けて来たのだが、上二人が女の子なので、今度ばかりは、何とかして男の子が欲しいと、姑^{いよめ}の入れ知恵で病院を変わったのであった。

そんなことを言われても、人間の肉体というものは、素人が考える以上に厳密に機械的なものであった。患者の中には、妊娠すると、しきりに、いつ性的な交渉を持ったか思い出そうとしているのがいるが、そんなデータは、医者にとっては不要なのである。最終月経の初日から数えて四週間をもつて妊娠は一カ月と数えるのだし、患者たちは毎朝起きたての、まだ動かないうちに——ということとは少なくとも六―八時間、持続して運動、飲食、厳しい精神活動などをしていないでいた直後という意味だが——婦人体温計で基礎体温を測れば、自分では気づかなくとも、排卵後には確実に体温が上がって来る筈であった。

この場合の体温の差というのは、摂氏の〇・五五から〇・五六度ということになっており、この高温相が十二日から十六日くらい続くと、下降期に入って月経が始まる。それ故この高温の時期が十八日以上続くと、妊娠かも知れないということになるのだが、この段階では、まだ妊娠反応もはっきり

とは掴めない。正確に妊娠反応がでるのは、五週間から六週間を過ぎなければだめなのである。

もっとも、どうしても男の子がほしいと姑から言われている嫁さんの場合、子宮底はすでに臍と恥骨の間まで上がっているし、胎児の心音も小型のマイクロホンを通してみごとに規則正しい雑音のように聞こえて来る。

「もう来月は五カ月で、腹帯だな」

貞春は医家向けに配られたカレンダーを見ながら言った。

「イヌの日は十二日と二十四日だからね。もう三回目なら、腹帯も自分で巻けるだろう」

「ありがたいことだよ、先生。今度は男だと思おうと楽しみですよ」

野辺地貞春は、時々、現実には「生活の達者」と呼んでもいい人々がいるように思うことがあるが、世間の多くの人たちが、その言葉に一種の皮肉をこめるのとは逆に、貞春はかなりまともに、彼らの生活上の自己主張の強さを評価していた。

胎児の性別は、受胎の瞬間にもう決まるのであって、それは簡単に言えば、「神さましかご存じないこと」なのだが、そんなことには一向にかまわない連中がいるのだ。その最たるものは、目の前のおかみさんのような神経の持主だが、こういう手合は、男の子が生まれれば、自分の手柄、女の子が生まれれば、それは先生のせいにしように思っている。

しかし、もっと知的な連中だって、貞春よりは、はるかに積極的である。貞春は一度だけ患者に執拗にせがまれて、男女の生み分け法に「科学的」な手を貸したことがある。それはいわゆるAIH（配偶者間人工授精）をやる時に、どうしても男の子が欲しいと言われて、夫の精液に遠心分離法を用いたのである。人間の性別を決めるのは、卵子ではなく精子で、そのうち小さなY染色体を持つのが男性決定精子で、X染色体を持つのは、女性決定精子といわれている。だから採取した精子を一分間に約二千回転する遠心分離器に五、六分かけると、重い方のX染色体と、軽いY染色体とに分れる。